

第3章 歴史資料からみた高野家三代と旧高野家住宅

1 高野家所蔵史料について

高野家に伝来する史料は、高野長英に関係する遺稿・遺墨等が瑞阜文庫に所蔵されてきた。それらは現在、重要文化財として高野長英記念館（一九七一年開館）に収蔵されている。

今回の旧高野家住宅の調査により、他にも多くの史料が確認された。史料は、上座敷の押し入れと、茶の間（常居）の仏壇下部に設けられた戸棚の中に収められ、総数は三五〇〇点ほどに及ぶ（図31）。主に近代以降の史料が中心であり、その一部からは、高野長英が過ごした時代の武家住宅の一部を残した高野家一二代・長閑や、国史跡指定に尽力した一三代・長運、および古稀庵と新座敷を建築した一四代・長経の事跡の一端がうかがえるため、本編では具体的にいくつかの史料を取り上げ、関連する文献を交えて解説する。

2 高野家改築の経緯

高野長英が居住したとされる旧宅は天明年間頃（一七八一～一七八九年）に建築されたが、明治九年（一八七六）、高野家一二代・長閑のときに改築されている。その経緯について、高野長運によって記された「史跡指定申請書」（「巻末資料（1）」）によれば、「全部の家屋を取り除き悉皆新築すれば却て建築も容易なれど此の二室許りも長英の記念物として残さねばならぬとして残した物である」という。「其後も同様の事を時々繰返して云はれた」とあり、長閑は息子の長運に対して高野長英時代の居室を残すことの重要性を度々説いていたと記される。

ここで、長閑が武家住宅の一部を残した背景として参照したい史料が、高



図31 史料が保存されていた上座敷の押し入れ（右）と仏壇下の棚（左）

野家に所蔵されている「高野長運年譜」〔資料編(2)・図32〕である。この史料は、長運が自分の来歴について「主として長英に關係ある事項を摘録す」として年譜にまとめたもので、昭和十三年(一九三八)頃に記したと見られる草稿を含めた二点が確認されている。この存在はすでに高橋碩一氏^(注1)によって指摘されているが、詳細を紹介するのは初めてとなる。

「高野長運年譜」には、家が改築された明治九年の記録として、以下のよう^(注2)に記されている。

明治九年明治大帝東北巡幸の際畏れ多くも非公式に御使者御差遣に相成り長英に關する事實を御下問あらせられしが當時父長閑は長英は幕府の罪人にて維新聞もなく未だ世間を憚る恐怖時代故只々恐縮感泣して何事も申上ざりき

明治天皇は明治九年に東北・北海道を巡幸し、七月四、五日には水沢を訪問^(注2)している。上記によれば、その折に天皇の使者が高野家を訪ねて長英に關して下問したが、長閑は維新後間もない時期にあつて「幕府の罪人」であるという意識から発言を控えたという。ただ、前述したように長英の居室を「記念物として残さねばならぬ」としていた長閑からすれば、長英の汚名をそそぐ気持が僅かともなかったとは考えにくい。それを裏付けるように、後の明治二十二年(一八八九)長閑は息子の長運に「直接御使者に申上げ兼ねしは今更遺憾なる事をせりと思ひ居れり」と後悔の念を語ったとある。この話を受けた長運は「孝道のためにも是非長英の事蹟を調査研究せんと決心」する。

史料が限られているため推測の域を出ないが、少なくとも改築の際に高野長英時代からあった上座敷・次座敷を活かした背景には、長英の事蹟を形と

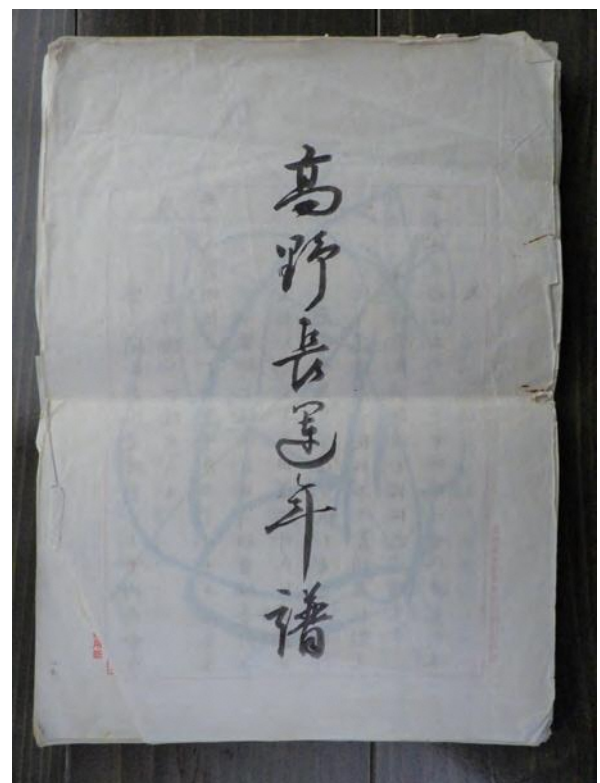
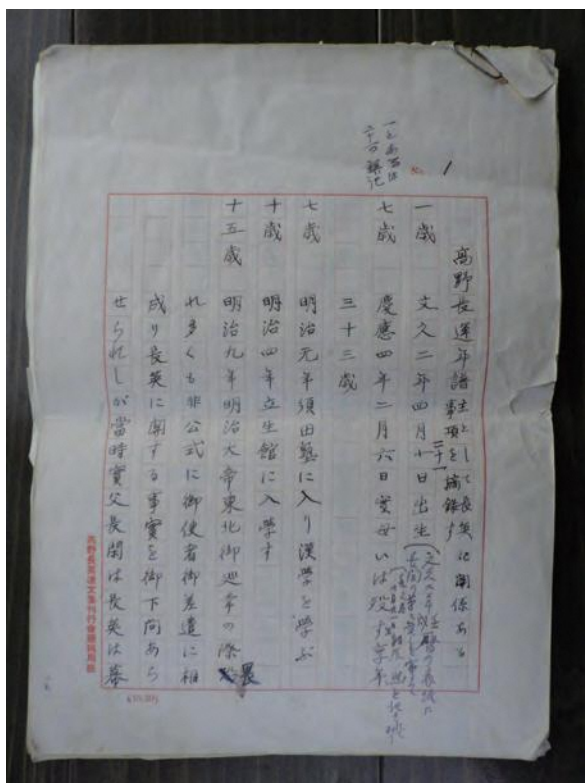


図 32 「高野長運年譜」(旧高野家住宅蔵)

して後世に残そうという長閑の意向があったことは確かである。またその意志は、息子・長運にも引き継がれることとなる。

3 高野家三代

高野長英が過ごした武家住宅の一部が残され、その後に国史跡指定されて保存され、今に残る一連の経緯において、改築の時期に当主だった高野長閑を始め、次代の長運、更にその息子の長経が果たした役割は重要である。本節では、近代以降の高野家三代について各人の項目を設けて略述する。

(1) 高野長閑(文政八年・一八二五～明治二十七年・一八九四)

高野家一二代当主。文政八年(一八二五)一〇月に磐井郡中尊寺村の佐藤寛蔵の次男として生まれた。一六歳で医師の道を志し、前沢の医師・志和氏の門人となり玄貞を名乗った。弘化元年(一八四四)に茂木恭一郎の仲介によって、長英の養女・千越と婿養子で高野家一代・東英の娘・能恵(一二歳)の婿となるも、翌年に能恵が病没する。^(注3) 時期は不明だが、後に長運の母となるいは(一八六八年没)と結婚している。

弘化三年(一八四六)に江戸へ出て七年の修行をし、嘉永五年(一八五二)九月に水沢へ戻り、高野家一二代として医業に専心した。^(注4) 慶応二年(一八六六)に留守家の御奉養次席となり、名を「長閑」と改める。^(注5) 戊辰戦争(一八六八～一八六九)の折には君命により従軍して傷痍兵の治療に当たり、明治三年(一八七〇)には胆沢県庁の命により県医と種痘所幹事を兼任した。^(注6)

前述のように、長閑は明治九年(一八七六)天皇巡幸の折に使者の訪問を受け、長英について尋ねられている。同年に高野長英が過ごした武家住宅の上座敷・次座敷の二間を残して自宅を改築した。また、明治一二年(一八七九)

には高野家の菩提寺である大安寺の累代墓地に、長英の墓石を建てている。この後、息子の長運によって長英の顕彰活動は本格化することとなるが、その端緒となったのが長閑の存在であったと言える。

(2) 高野長運(文久二年・一八六二～昭和二十二年・一九四六)

高野家一三代当主。文久二年(一八六二)四月に、高野長閑といはの長男として水沢に誕生する。明治二年(一八七八)一七歳で岩手医学校に入学し、家業である医師の道を歩み始める。翌年、水沢の辻山呉服店の娘・カメノと結婚する。明治一六年(一八八三)岡山医学校に転学し、同一八年(一八八五)東京順天堂医院で内外科の研修を実施、東京での資格試験に合格後の明治二〇年(一八八七)、水沢に帰り医業に従事した。^(注7) 水沢に戻って二年後の明治三二年(一八八九)二八歳の時、父・長閑より明治天皇巡幸の折に高野長英について尋ねられた話を聞き、「長英の事績を調査研究せんと決心」したことは既述の通りである。

長運が長英のことを調査研究した背景には、明治中期以降に現れた高野長英に関する伝記類の存在もあった。高野長英について、藤田茂吉『文明東漸史』(一八八四年)、芝山之史『近古 慷慨家列伝』(一八八五年)、肴夢楼主人『日本文明土』(一八八六年)で取り上げられたほか、明治一九年(一八八六)には歌舞伎の演目として「夢物語 蘆生容画」が新富座で上演されている。^(注8) 徐々に長英に注目が集まり、復権の兆しが生じた一方で、長運は「事蹟誤伝を遺憾として」いた。そのため、自宅に所蔵されていた遺稿や書簡などを始め、関連する文献等を渉猟して、顕彰を目的とした調査研究を始めた。

長運が本格的に長英の顕彰に動き出したのは明治二五年(一八九二)のことである。「高野長運年譜」(巻末資料(2))によれば、この年に「宮内大臣土方久元に面会し長英の遺書を提出して明治九年 明治大帝より御下問あ

りし状況を具に陳情」している。また同年に岩手県知事・服部一三に面会したところ、「我県下に斯る偉人のある事を知らざりしは全く我輩の認識不足なりき自今我輩は貴君の代り運動するにより万事我輩に一任せられたし」と言われたとある。これを受けて長運は、数年にわたって収集していた長英の関係資料を同知事に送付している。

長運が大臣や知事との面会を経て、具体的にどういった運動がなされたか詳らかでないが、長英の顕彰活動の機運を高める糸口になったと考えられる。その可能性を伝える史料として、明治三十四年（一九〇一）に建立された記念碑の寄付目録「建碑賛助芳名録」を参照したい。^(注9) この建碑運動は、長運ら親族および門人が発起人となって始められ、賛助者として勝安房（海舟）や水沢出身の後藤新平・齋藤實などがある。寄付者の一覧には、伊達家三〇代当主・宗基を筆頭にして、大隈重信や井伊直憲らが名を連ね、面会した土方久元などの政治関係者、また渋沢栄一など実業界の重鎮も出資していることが確認される（図33）。高野長英の顕彰活動が水沢の地域を越えて展開した理由の一端には、長運が大臣や知事らと機縁を得たこともあったのだろう。後藤新平を始めとした水沢の名望家たちの存在も大きかったと考えられるが、そのことは次節で詳述する。

時期は前後するが、明治三十一年（一八九八）七月四日、「勤王家」としての評価が認められ、高野長英に正四位が贈位される。^(注10) これを境に、長英の復権に尽力してきた長運の顕彰活動はより活発となる。上述の建碑運動もその一環であるが、特に力を入れたのが出版物の刊行である。

長運は、明治三十二年（一八九九）に一〇年間にわたり収集した長英関係資料を長田権次郎（偶得）に提供し、『高野長英先生伝』（弘文堂）の編纂を依頼した。また、同年に自ら『高野長英先生遺墨』を編集し私家版として発行、建碑の支援者などに頒布した。顕彰碑建立に際しては『贈正四位高野先

生建碑録」なる小冊子を印刷し、寄付者などに贈呈している。明治四五年（一九一二）四月には、長英の調査研究を目的として東京に移住し、医業の傍ら資料収集に従事した。そして、多年の成果として昭和三年（一九二八）に『高野長英伝』（史誌出版社）を刊行する。その緒言には以下のようにある。

明治三十二年十月、高野長英記念碑建設に際し、同県人長田偶得氏に編纂を嘱して『高野長英先生伝』を刊行しましたが、当時多忙の間に完成を急ぎ、且資料の蒐集充分ならず、遺憾の点少からざりし為め、他日機を見て之が訂正増補を行はむとし、爾来一層遺蹟資料の探求に没頭しつつあつたのであります

既存の資料に新資料を追加しての作業は長い年月と多くの手数を要し、「女婿小野甫善をして助成せしめ」「医業一切を長男長経に任せ」^(注11) たという。また、昭和六年（一九三一）には遺著遺墨をまとめた『高野長英全集』を編纂するも出版社が決まらず、「同族及一、二の同志と協議の結果、刊行会を組織して（…）漸く刊行する」^(注12) に至り、発行所である「高野長英全集刊行会」の住所は水沢の自宅となった。長運の顕彰活動は、家族・親族の協力と支援のもとに遂行されたと言える。

昭和八年（一九三三）、「贈正四位高野長英成長の家屋」として昭和六年に申請していた国の史跡指定が認定され、「高野長英旧宅」として登録される。「高野長英旧宅」が国の史跡として認定されたのは、前提として長英の名誉回復に尽力した長運の積年の営為があり、一連の活動が素地となって果たされたと捉えることもできよう。長運は、晩年の昭和十八年（一九四三）に『高野長英伝』の増補改訂版（岩波書店）を刊行するなど、昭和二十一年（一九四六）に八七歳で没するまで終生を長英の顕彰に努めた。

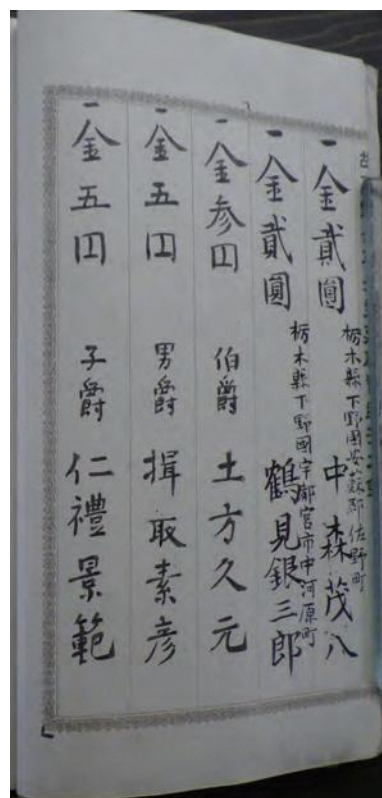
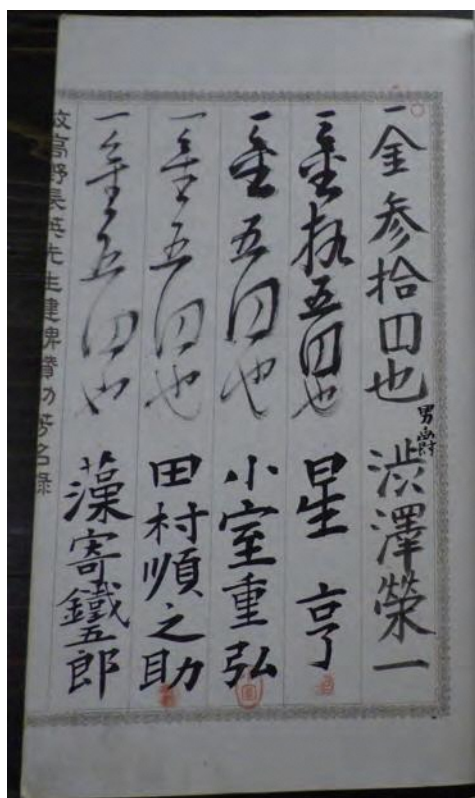
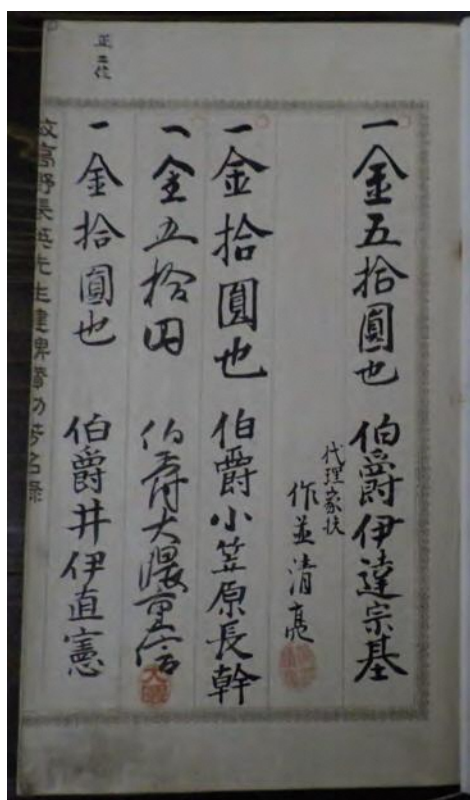


図 33 「建碑賛助芳名録」(旧高野家住宅蔵)

(3) 高野長経(明治二年・一八八八〜昭和四六年・一九七六)

高野家一四代当主。明治二年(一八八八)年十一月、高野長運の長男として水沢に出生する。明治三四年(一九〇一)に岩手県立一関中学校、同三年(一九〇五)に宮城県立仙台第二中学校に入學、同校を卒業後に東京帝国大学医学部に進學し、大正六年(一九一七)に卒業、足尾銅山病院に就職した。^(注13)なお、長経が二四歳の時(明治四五年)、前述のように長運の意向により長英関係資料収集のため家族で東京に転居している。昭和三年(一九二八)に一家は水沢に戻り、高野医院を再び開業し、長運とともに経営する。^(注14)時期は不明だが、菊池タマと結婚している。

長経は、昭和六年(一九三一)に父・長運の七十の賀として、離れ座敷の「古稀庵」を建築した。また、昭和一六年(一九四一)に「高野長英旧宅」と「古稀庵」を接続する形で新座敷を増築し、長経はここに住んだ。

長運が没した後、昭和二四年(一九四九)に「高野長英没後百年祭」を執り行うなど顕彰活動を継承した。しかし、昭和四一年(一九六六)に「高野長英顕彰会」が発足した折、有志に乞われて初代会長に就任した際に寄稿した文章には以下のように記している。^(注15)

私が小学校尋常科の頃に及んで、父は長英顕彰の奔命に疲れ、結核に蝕ばまれて我が家は見る見る赤貧におちいり、豆腐一丁買うのも困難であつたことを私は記憶しております。こうしたことが一方では長じて家業を営むにおよび、私をして極度に貧乏を嫌わせ、一意医業に没頭せしめ、そうして長英先生からも遠ざけてしまったとゆうような気がするのです。

この寄稿文の中で長経は、自身が挙行した没後百年祭について「プーアなそしてミゼラブルな記念祭」と表現し、「無性に憤りと悲しみを感じ」たと記している。だが、その一七年後に「高野長英顕彰会」に参加し、「私の胸底に長英先生や父長運に対する謝罪の涙が静かに湧いて」、これが「私の開眼であり発心であつた」と述懐している。

長経は「高野長英記念館」の建設運動の先頭に立ち、昭和四六年(一九七一)の開館に向けて顕彰会の会長として力を尽くした。瑞阜文庫に所蔵されていた長英関連資料は記念館に収蔵されることになり、長英の事蹟を伝える拠点となった。会長を辞任してからは、顕彰会の関係者が「古稀庵」に集って、座談会などを開催していたという。^(注16)長経は、晩年になってから父・長運の意志を継いで長英の顕彰に努め、水沢の地に根付かせる活動を行った。

以上のように、高野長英の事蹟を残すための営みは、長閑・長運・長経の高野家三代によって引き継がれ、様々な形で後世に伝えられるものとなった。長英が過ごした時代の武家屋敷の一部を含めて改築・増築された旧高野家住宅もまた、その一環として評価されるべきものであろう。

4 水沢出身者による長英顕彰活動

前述のように、昭和八年に「高野長英旧宅」が国史跡に指定された経緯には、高野長運を中心とした一連の顕彰運動があつたが、その背景には活動を支援した水沢出身の有志たちの存在がある。高野長英の顕彰は、高野家だけではなく水沢の人々にとっても意味を持ったようで、親族の範囲を越えた活動として展開していたことが史料から跡づけることができる。

特に、その活動において重要な役割を果たしたのが後藤新平である。後藤は「平生自分は長英の又甥であると称してゐた」^(注17)とされるが実際に遠縁にあたり、^(注18)縁者として顕彰活動に積極的な姿勢を見せた。「予を感化せる高野長

英」と題した文章の中では「もし高野が明治の御代まで生きて居たなら、必ず国家の高官になり得て、国家の為に其智識を發揮し得た事と思ふ」^(注19)と述べて評価している。

後藤の顕彰活動の始まりについて伊藤鉄夫氏が紹介した史料によれば、愛知県で病院勤務していた明治一五年頃に、長英の事を世に伝えるため「有志輩を募り碑文にて相建候はゞ亡長栄の本懐に可有之か」^(注21)と書簡に記している。この後、内務省衛生局に転出して上京し、そこで本格的な活動に乗り出したようである。そのことについて、明治二五年（一八九二）の『読売新聞』の記事が以下のように伝えている。^(注22)

内務省衛生局長後藤新平氏ハ其昔渡邊華山と共に開国の先導者を以て自から任じ徳川幕府の嫌疑を受けて縲紲の辱を蒙り江戸に押送の途中自殺して白骨永く小塚原の月に露されし故高野長英氏の甥なるを以て先年より其の碑を建設せんと計画し碑文ハ勝海舟伯の撰篆額ハ伊達宗城侯碑文揮毫ハ松本順氏に托したる由なるが此三氏も皆高野氏に因縁深きを以て殊に建碑の事にハ労を執らるゝと云尚ほ場所ハ未定なれど明年ハ高野氏の四十三回忌なれば目下建碑の運びを取り急ぎ居らるゝよし

これは、明治三一年（一八九八）東京青山の善光寺に建立された顕彰碑の建碑運動の様子を伝えるものである。後藤が中心となって、勝海舟や旧宇和島藩主の伊達宗城らに依頼するなど、建碑の実現に向けて動いていたことが報じられている。このことに関連して、大槻如電が『朝日新聞』に寄せた記事には^(注23)

後藤満鉄総裁は同族でありますから、世に埋れた名を顕はさせ様と云ふことで、私に相談がありまして、贈位の事を申立て、又建碑の事も思ひ立ち、仙台人士の間に色々話し合ひまして、三十一年七月に従四位を贈り賜はりました

とあり、高野長英の贈位や建碑など顕彰運動の背景に、後藤新平を起点として一部の旧仙台藩士と連携する動きがあったことに触れている。

後藤は昭和三年（一九二八）に高野長運が『高野長英伝』を刊行した折、天皇皇后へ献上する仲介を引き受けるなど、翌年に没するまで高野長英の顕彰活動に関与を続けている。

また、高野長英の顕彰活動に参画した特筆すべき人物として齋藤實を挙げることができる。齋藤は、先述した通り水沢の建碑運動の賛助者として名を連ねている。旧高野家住宅にはその際の支援者の書状を屏風に仕立てたものが残されているが、ここに後藤新平・齋藤實の筆跡も含まれている（図34、36）。

また、昭和八年に「高野長英旧宅」が国史跡指定されたことを受けて史跡標識を建てる際、齋藤は石柱に刻む「史蹟 高野長英舊宅」「史蹟名勝天然紀年物保存法ニ依り昭和八年四月文部大臣指定」の文字を揮毫している。^(注25)この標識は現在も門前に設置されている（図37）。

他にも、『高野長英伝』が岩波書店で再版される際に援助した三菱重工社長の水沢清も水沢出身者の一人である。^(注26)恐らく、顕彰運動が地域的な範囲を越えて展開し得た背景に、同郷の名望家の存在があったと見て良いだろう。前節で高野家三代について述べたが、その支援者として水沢の有志たちは大きな役割を担ったと考えられる。^(注27)顕彰運動の一環として国史跡に登録された「高野長英旧宅」は、彼ら長英を慕う水沢の有志一同にとっても守るべき



図 34 「屏風」(旧高野家住宅蔵)



図 37 「高野長英旧宅標識」

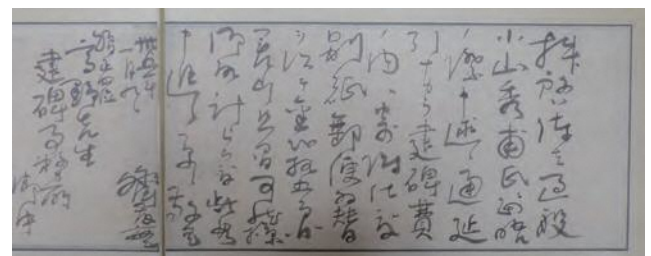


図 35 「屏風」(旧高野家住宅蔵)の「齋藤實書状」

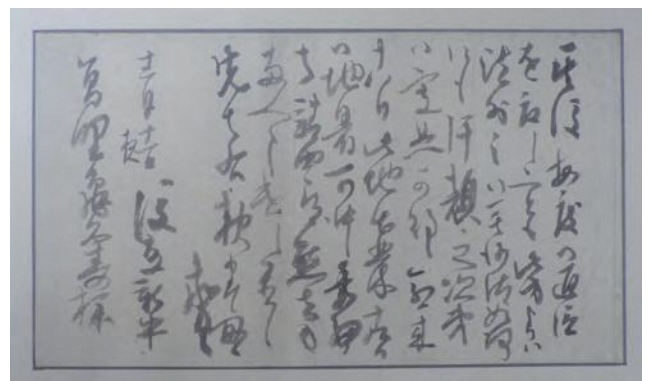


図 36 「屏風」(旧高野家住宅蔵)の「後藤新平書状」

地域の“宝”であったはずである。

5 小結

以上、本稿では旧高野家住宅に所蔵されている一部の史料と関連する諸文献に基づいて、武家屋敷の一部を残して改築された経緯や、それに関連して高野長英の顕彰活動について述べてきた。

旧高野家住宅は、明治時代の改築の際に高野長英時代からあった上座敷・次座敷を残した。その背景に長英の事績を形として後世に残そうとした二代・長閑の意向があり、意志を継いだ一三代・長運が長英の顕彰運動を展開、その活動が礎となって「高野長英旧宅」が国史跡指定された。一四代・長経は、「高野長英旧宅」に「古稀庵」「新座敷」を増築するとともに、顕彰活動を継承して、長英の資料や遺品などを保存することに努めた。また、高野長英の事蹟を残すための営みは高野家三代によって引き継がただけでなく、後藤新平や齋藤實など水沢出身の人々によっても担われ、様々な形で後世に伝えられるものとなった。長英が過ごした時代の武家屋敷の一部を含めて改築・増築された旧高野家住宅は、この一連の歴史的な経緯を踏まえて評価されるべきであろう。

旧高野家住宅に所蔵されている史料のうち、今回取り上げることができたのは一部に限られている。更なる詳しい調査や解説が求められるだろう。その上で、いくつかの史料については然るべき場所に保存することも検討すべきかと考えられる。今後の課題として記して終えることとする。

脚注

注1 高橋氏は高野長運『高野長英伝』（岩波書店、一九七一年）の解説、及び『高野長英全集』（第一書房、一九八二年）あとがき「監修を了えて」で「長運年譜」の一部を引用している。

注2 『読売新聞』明治九年七月一〇日、一一日朝刊を参照した。

注3 『再刊 高野長英顕彰会報 附 高野長英関係年表』（高野長英顕彰会、二〇〇三年）「高野長英関係年表」一五一―一八七頁による。

注4 卷末資料（3）「高野長閑墓碑面撰文」による。

注5 注3を参照。

注6 注4を参照。

注7 卷末資料（2）「高野長運年譜」による。

注8 注3を参照。

注9 初めての建碑運動は明治二四年（一八九一）に起こり、明治三一年（一八九八）勝海舟の撰文で東京青山の善光寺に建てられた。次は、正四位が贈位された際に発起され、明治三四年（一九〇一）に水沢公園内に建立、「高野長英五〇年祭」において除幕された。この史料は後者の顕彰碑の寄付名簿と考えられる。

注10 『朝日新聞』明治三一年七月五日（朝刊）「勤王家陞贈位（百七十二名）」による。

注11 高野長運『高野長英伝』（史誌出版社、一九二八年）「緒言」による。

注12 『高野長英全集（第一巻 医書）』（高野長英刊行会、一九三一年）「緒言」による。

注13 『再刊 高野長英顕彰会報 附 高野長英関係年表』（高野長英顕彰会、二〇〇三年）「忘れ得ぬ人③ 高野長経」（一七頁）による。

注14 注7による。

注15 『再刊 高野長英顕彰会報 附 高野長英関係年表』(高野長英顕彰会、二〇〇三年) 高野長経「顕彰会長になるにあたって」(七頁)による。

注16 『再刊 高野長英顕彰会報 附 高野長英関係年表』(高野長英顕彰会、二〇〇三年) 伊藤鉄夫「長経さんと長英伝」(一九頁)による。

注17 鶴見祐輔『後藤新平』第一巻(後藤新平伯伝記編纂会、一九三七年)による。

注18 後藤新平は高野長英の母方・後藤家の家系で、長英とは一六等親の間柄とされる(『再刊 高野長英顕彰会報 附 高野長英関係年表』(高野長英顕彰会、二〇〇三年)「長英に関する誤伝・誤解などについて」(八四・八五頁)を参考)。

注19 後藤新平「予を感化せる高野長英」(立石駒古編『後藤新平論集』東京堂、一九一一年)より。

注20 水沢市文化財委員会専門委員で「高野長英顕彰会」の事務局長を務めた。

注21 『再刊 高野長英顕彰会報 附 高野長英関係年表』(高野長英顕彰会、二〇〇三年) 伊藤鉄夫「新平の長英顕彰ことはじめ」(一〇二・一〇三頁)による。

注22 『読売新聞』明治二五年一月一日朝刊三面より。

注23 『朝日新聞』明治四〇年六月二三日朝刊三面より。

注24 注7による。

注25 注7による。また、「旧高野家住宅」の調査で建造を依頼した石材商の書状(昭和八年一〇月二〇日付)が発見され、そこに「斎藤子御揮毫の本紙書簡郵便にて御返送申上候也」とある。

注26 高野長運『高野長英伝(増補改訂版)』(岩波書店、一九四三年)「緒言」を参考。

注27 「高野長英記念館」には、正四位が贈られた際に寄せられた後藤新平や齋藤實などの書状がまとめられた「第二号方帖」が保存されており、注目される。

第4章 旧高野家住宅の文化財的価値

旧高野家住宅は一八世紀末に建築されて明治九年（一八七六）に大きく改造が施された高野長英旧宅、昭和六年（一九三一）の古稀庵、昭和一六年（一九四一）頃の新座敷という、時期を異にする意匠を凝らした三棟がひとつながりの廊下で見事に接続される。

これら三棟それぞれの意匠的価値が高いだけではなく、その複合された建築群としても貴重な建物である。三棟それぞれは建設時期が異なるだけでなく、武家屋敷の平面構成をとどめる旧宅、数寄屋造りの銘木や意匠を凝らした古稀庵、幾何学的内装で文人趣味を彷彿させる新座敷と、その意匠的形式が異なる点も建築的特徴だからである。

新座敷の文人趣味にみられた重要文化財旧高橋家住宅と類似する意匠的な特色は、旧高橋家住宅との関係や医家という家柄、つまり近代和風建築が集積する水沢の地域性や高野家の歴史との関係からも評価することができる。さらに、旧宅の建設は医家を創始した高野元端の時代、そして古稀庵と新座敷は高野長英復権に尽力した長運・長経の時代と考えれば、史跡指定されている旧宅部分のみならず、長英ゆかりの歴史資料保存のために建築された瑞阜文庫も含めて、屋敷構えを構成する各建造物が医家としての長い歴史を誇る高野家、そして高野長英をめぐる歴史から生まれたという歴史的価値を有する。

たとえば古稀庵の設計者として、大工棟梁だけではなく建築家であった岡村潤治が携わっていたことも、高野長英の顕彰活動を通じた長運と長経の人の脈ゆえと考えることもできるだろう。個人住宅でありながら、長英顕彰活動を進めた家柄が、特異な建造物群をつくりあげることになった。

以上のように旧高野家住宅は、各建造物が優れた建築的特徴をそなえる意匠的価値に加えて、その様式を異にする建築群がひとつに複合している景観的価値、さらにその建築背景に地域や家の歴史を物語る歴史的価値もあわせもつ、貴重な建築群といえよう。

参考文献

- 1 佐藤秀昭（編著）『高野長英顕彰会報』高野長英顕彰会、二〇〇三年
- 2 斎藤広通「『仙台建築会』の研究その1——会員について」
日本建築学会学術講演梗概集（北陸）、二〇一九年
- 4 立石駒吉編『後藤新平論集』東京堂、一九二一年
- 5 高野長運『高野長英伝』史誌出版社、一九二八年
- 6 『高野長英全集』高野長英刊行会、一九三一年
- 7 鶴見祐輔『後藤新平』後藤新平伯伝記編纂会、一九三七年
- 8 高野長運『高野長英伝（増補改訂版）』岩波書店、一九四三年
- 9 高野長運『高野長英伝』岩波書店、一九七一年
- 10 『高野長英全集』第一書房、一九八二年
- 11 『高野長英の手紙（改訂版）』高野長英記念館、二〇〇〇年
- 12 『再刊 高野長英顕彰会報 附 高野長英関係年表』
高野長英顕彰会、二〇〇三年
- 13 鶴見俊輔『評伝高野長英』藤原書店、二〇〇七年
- 14 『高野長英記念館展示図録』高野長英記念館、二〇一九年

卷末資料

(1)「史跡指定申請書(複写)」(高野長英記念館蔵)

高野長英旧宅

所在地 岩手県胆沢郡水沢町字塩竈

指定地積 民有 一筆 五百二坪 内百二十六坪五合

説明

明治九年ノ改築ニヨリ屋根其ノ他ハ高野長英ノ居住セシ当時ノ原状ヲ詳ニスルコト能ハザルモ階下八畳六畳ノ二室ハ長英ノ居室ニシテ旧構ヨク存セリ

指定ノ事由 保存要目史蹟ノ部第八ニ依ル

保存ノ要件 公益上必要已ムヲ得サル場合ノ外現状ノ変更ヲ許可セサルコト
ハ勿論旧時ノ建物ノ修理並ニ火氣ノ使用等ニ付十分ノ注意ヲ要ス

史跡指定申請書

一 贈正四位高野長英成長の家屋

位置岩手県胆沢郡水沢町塩竈二百六番戸高野長運住宅

右史蹟保存規定により御指定相成度別紙家屋来歴書宅地家屋の平面図家屋の立面図断面図及室内外正面の写真相添へ此段申請仕候也

尚御指定相成候上は保存会を組織し建物の修理保存に注意可致候

岩手県胆沢郡水沢町塩竈二百六番戸

昭和六年九月二十九日

申請人 高野長運(印)

文部大臣田中隆三殿

高野長英成長の家屋来歴

鼻祖高野佐渡守勝氏は上杉謙信に仕へて軍功あり感状を送られた写しが残つてゐる尚遡りて其祖先を上杉家に就て探究せしも記録なく不明であるが上り藤に二の字の家紋によつて藤原氏より出でしものと想察せらるゝのである勝氏は甘糟備後に属して白石城にありしが伊達政宗の襲ふ所となり落城の後伊達上野に預けられ客分として生涯を送り二代氏信より留守家の家臣となつたのである

長英の成長せし家屋の二室は建築家の鑑定によれば百五十余年前の建築物の由にて今より七十三年前の安政六年三月十三日当町内柳町より発火せる三蔵火事と唱ふる殆んど全町を烏有に帰せしめた大火災にも災害を免れた建物である私の父長閑が今より五十六年前の明治九年に住宅改築の際私十五歳の時全部の家屋を取り除き悉皆新築すれば却て建築も容易なれど此の二室許りも長英の記念物として残さねばならぬとて残した物である其後も同様の事を時々繰返して云はれた

初代勝氏より七代目の元端は今より百九十一年前の寛保元年の出生にして百五十一年前の天明元年には四十一歳に相当し明治九年改築前の家宅は萱葺屋根にして玄関傍に書生部屋等があり昔時の医家風の建物であつた元端は高野家医の開祖であり年代の符合する点により思考すれば元端の建築せる家宅なることを想察し得らるゝのである長英は今より百二十八年前の文化元年五月五日の誕生にして高野家に於て成長したる事実には就ては正確なる遺書がある即ち天保元年九月二十日親戚に寄たる書翰中に「高野の家には小生幼少より深く蒙育長之恩候へば」云々と記してあり又後藤家系図中四十四代実元の所に「継母は高野元端女実慶死去後高野家に帰籍」とありそして長英の所には「三男悦三郎卿齋と称し後ち長英と改む母は高野氏文化元〔甲子〕五月五日生る高野氏の嗣となる」とあり是等の書類によつて長英の実母美代が文化

九年長英九歳の時実父実慶没後高野家に復籍し母子共に同居して成長せるを
確知することが可能なのである尤も母復籍前より玄齋の女千越と約婚長英
は高野家に多く居りて元端玄齋の薫陶を受けてはゐたのである斯くて文政三
年長英十七歳に至るまで高野家に於て成長し同年春江戸へ上り其後江戸遊学
時代と流離時代と二回帰省したが其間に往復せる書翰及遺著等は今尚多数残
存してゐる（高野長英伝参照）宅地は祖先伝来の一筆一反六畝二十二歩にし
て此の内百二十六坪半は今般指定申請の地所である

右

高野長運

（2）「高野長運年譜」（旧高野家住宅蔵）

高野長運年譜「主として長英に関係ある／事項を摘録す」

二

一歳 文久二年四月一日出生「文久二年「壬／戌」暦の表紙に／

長閑の筆と覚しき字にて「喜之寿四月廿一日朝辰ノ時」と記されてあり」

七歳 慶応四年二月六日実母いは歿す享年三十三歳

七歳 明治元年須田塾に入り漢学を学ぶ

十歳 明治四年立生館に入学す

十五歳 明治九年明治大帝東北巡幸の際畏れ多くも非公式に御使者御差遣に
相成り長英に関する事実を御下問あらせられしが当時実父長閑は長英は
幕府の罪人にて維新聞もなく未だ世間を憚る恐怖時代故只々恐縮感泣し
て何事も申上ざりき

十七歳 明治十一年岩手医学校に入学医学を修む

十八歳 明治十二年水沢町呉服店辻山又治郎姉カメノと結婚す

廿二歳 明治十六年岡山医学校に入学医学を修む

廿四歳 明治十八年東京順天堂医院に於て内外科を实地研究す

廿五歳 明治十九年十一月東京に於て内務省医術開業前期試験に及第す

廿六歳 明治二十年四月東京に於て内務省医術開業後期試験に及第す

廿六歳 明治二十年十一月水沢町に帰郷医術を開業す

廿七歳 明治廿一年十一月二日長男長経出生す

廿八歳 明治廿二年父長閑より明治九年明治大帝より長英に関する事実を御

下問ありし顛末を始めて聞かせられたり其時父長閑の談話には御使者に

戸長にても御案内に付添へ来らば戸長を通じて詳細の事実を御話申上げ

んと思ひしも誰も地方の人が付添へ来らざりし為め直接御使者に申上げ

兼ねしは今更遺憾なる事をせりと思ひ居れり言ひ居れり其の事を聞きて

より孝道のためにも是非長英の事蹟を調査研究せんと決心するに至れり

廿九歳 明治廿三年七月廿二男長春^{ヒデ}出生せしも同年九月十六日歿す

三十一歳 明治廿五年一月七日長女英出生現在小野甫善に嫁す

三十一歳 明治廿五年宮内官矢野文雄氏を訪問し同氏の紹介にて宮内大臣土

方久元伯に面会し長英の遺翰を提出して明治九年明治大帝より御下問あ

りし状況を具に陳情せり

三十一歳 明治廿五年岩手県知事服部一三氏に面会して宮内大臣に面会の状

況を陳述せしに同知事は我県下に斯る偉人のある事を知らざりしは全く

我輩の認識不足なりき自今我輩は貴君に代り運動するにより万事我輩に

一任せられたし併し長英先生の事蹟は能く知らざるが故に貴君の調査せ

る資料を送付せられたしとの事に付自分の調査研究せる資料を同知事に

送れり 長運と改名

三十二歳 明治廿六年六月十五日二女瑞^{タマ}出生現在石井寿雄に嫁す

三十三歳 明治廿七年九月廿三日父長閑歿す享年七十歳

三十四歳 明治廿八年十月廿七日三男長春出生ス

三十七歳 明治三十一年七月四日曾祖長英に贈正四位の恩命ありて其辞令を
拝受す

三十七歳 明治三十一年十月地方有志会合して長英の記念碑建設を協議決定
す

三十八歳 明治三十二年七月二十日長英建碑の挙を聞召され建碑費として御
内帑金壹百円を下賜せらる

三十八歳 明治三十二年七月五日高野長英先生遺墨を編纂発行して二円以上
の建碑費義捐者に対し高野長英先生伝及贈正四位高野先生建碑録縮碑摺
と共に之を贈呈す

三十八歳 明治三十二年十月三十日十年間蒐集せる資料を提供し且つ相当編
纂料を支出して前年長田権次郎氏に委嘱せし高野長英先生伝完成に付之
を発行して建碑費一円以上の義捐者に対し建碑録及縮碑摺と共に之を贈
呈す

三十八歳 明治三十二年十二月廿八日高野長英遺墨帖三部及高野長英伝三部
を男爵鈴木大亮氏を通じて天皇皇后両陛下皇太子殿下へ献上す

四十歳 明治三十四年三月十一日碑文摺本四葉伊達宗基伯を通じて聖上皇后
両陛下皇太子妃両殿下へ献上す

四十歳 明治三十四年五月五日水沢公園内に従一位勲一等侯爵伊達宗城象額
肥前谷口中秋撰文正四位勲三等金井之恭書の贈正四位高野先生記念碑竣
功し其除幕式兼五十年祭を挙行す

四十歳 明治三十四年五月五日追弔詩文、歌俳集、決算報告、建碑に関する
一切の事実を網羅記載せる贈正四位高野先生建碑録と名づくる小冊子を
印刷して縮碑摺と共に一般の建碑費義捐者と碑文歌俳寄贈者と共に贈呈す

五十一歳 明治四十五年四月東京に移住し医業の傍ら長英の資料蒐集及子女
教育上の監督に従事す

五十六歳 大正六年十二月長男長経東大医学部を卒業して医学士となる現今
は高野医院院長なり

六十歳 大正十年四月三男長春東大法学部を卒業し法学士となる現今は岐阜
県学務部長を奉職す

六十七歳 昭和三年三月二十日多年苦心著はす所の高野長英伝を完成発行す
六十七歳 昭和三年六月二十日後藤新平伯を通じて高野長英伝三冊を 天皇

皇后両陛下皇太后陛下へ献上す
六十七歳 昭和三年八月十三日帰郷長男長経と共に高野医院を経営し院主と
して今日に至る

七十歳 昭和六年七月十五日多年資料蒐集に努力して編纂せる高野長英全集
全四冊を完成発行す

七十一歳 昭和七年三月三十一日高野長英全集第一巻より第四巻に至る全四
冊宛三組計十二冊を岩手県を通じて天皇皇后両陛下皇太后陛下の側近に
献上せしに畏くも御採納の光栄を賜はる

七十一歳 昭和七年十月瑞阜文庫を邸内に建設して長英に係る文書を所
蔵せり

七十二歳 昭和八年四月水沢町大畑小路の邸宅を文部大臣より史蹟高野長英
旧宅として指定せらる

七十二歳 昭和八年十月三十日斎藤子爵書仙台石の史蹟標識竣工して其報告
祭を挙行す

七十五歳 昭和十一年五月三日長英伝及全集編纂に内助の功少からざりし妻
カメノ歿す享年七十四歳

七十五歳 昭和十一年十月三十日従来の長英墓碑は幕府^{世間}を憚り狭隘

なる墓地に型ばかりのものを建設しあつたので甚だ之を遺憾とし別に大安寺山門内に新墓地を卜し此処に旧碑を移して其の傍に新墓碑と骨堂を建設し長英画像の写真を靈体とし之を陶器に入れ又是と同時に長英の実母美也の遺骨をも前沢の親戚茂木家の墓地より分骨して別箇の陶器に入れ共に骨堂に納め長英祥月命日に近親参列建碑竣工の仮式典を挙行す

七十五歳 昭和十一年十二月八日秩父宮同妃両殿下の御来町を仰き駒形神社に御休憩中長英遺物御台覧の光栄に浴し種々難有御下問を拝した尚同月十三日御礼言上の為め上京する佐々木水沢町長に託し高野長英全集四冊を献上した

因に高野長英伝は既に昭和三年六月二十日後藤新平伯を通じて 三陛下及秩父宮 高松宮両殿下に各一冊宛献上してある為め今回は全集而已を献上した訳である

(3)「高野長閑墓碑面撰文」(旧高野家住宅蔵)

高野長閑之墓

墓碑面撰文(両側面及背面)

翁氏高野称玄斎後改長閑蓋称者書于君之賜也家世以醫業歷仕邑主留守家翁以文政八年十月朔日生資性勤慎年甫十六志于医弘化三年寓江都修醫業茲許七星霜業漸進嘉永五年九月歸鄉開業于水沢翁以受長英翁之後日夜孜孜勉業其尋常醫之遠所不及也接其患者頗懇篤内外施治之活法所其自得者尤多矣殊如外科手術得名豎花岡泰潤氏之伝至其術実達妙機患者乞治者日々輻湊其門文久三年五月被懼而為侍医戊辰之役奉君命從軍療傷者明治三年七月以胆沢県庁之命為県

醫兼種痘所幹事同十二月請退職專応患者之請不論僻村不厭陋屋於是足跡遠近無不到処老而益勉矣同十七年四月法諡曰杏樹院静堂長閑居士同二十七年八月廿四日病没享年七十

明治三十年一月

孝子 高野長運 建之
門人合資

岩手県奥州市文化財調査報告書第一集

歴史的建造物調査報告その一

旧高野家住宅（高野長英旧宅・古稀庵・新座敷ほか）

執筆…中村琢巳・河内聡子

発行…奥州市教育委員会

（岩手県奥州市江刺大通り一番八号 歴史遺産課）

発行年…令和五年（二〇二三）三月